

集韻
單語篇
解
全

790
三
一本

特34

900

櫻井先生 閱
松井惟利 翰錄

單語篇詠解

東京 小松園藏板

為多子



櫻井為友 書

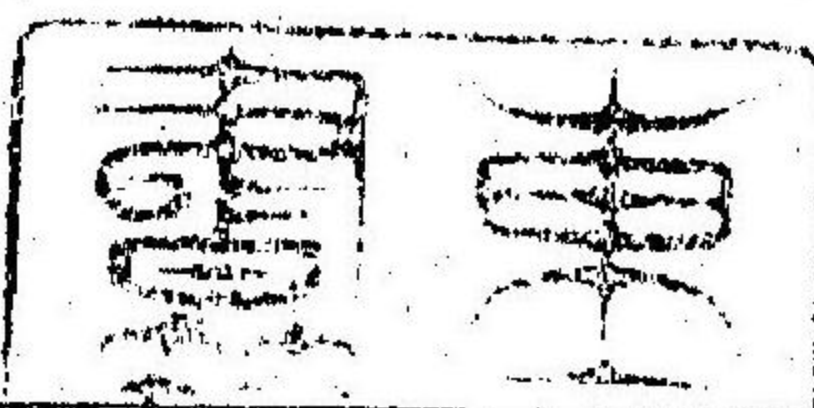


臣 吾彦 解

小松園藏板

特34

900



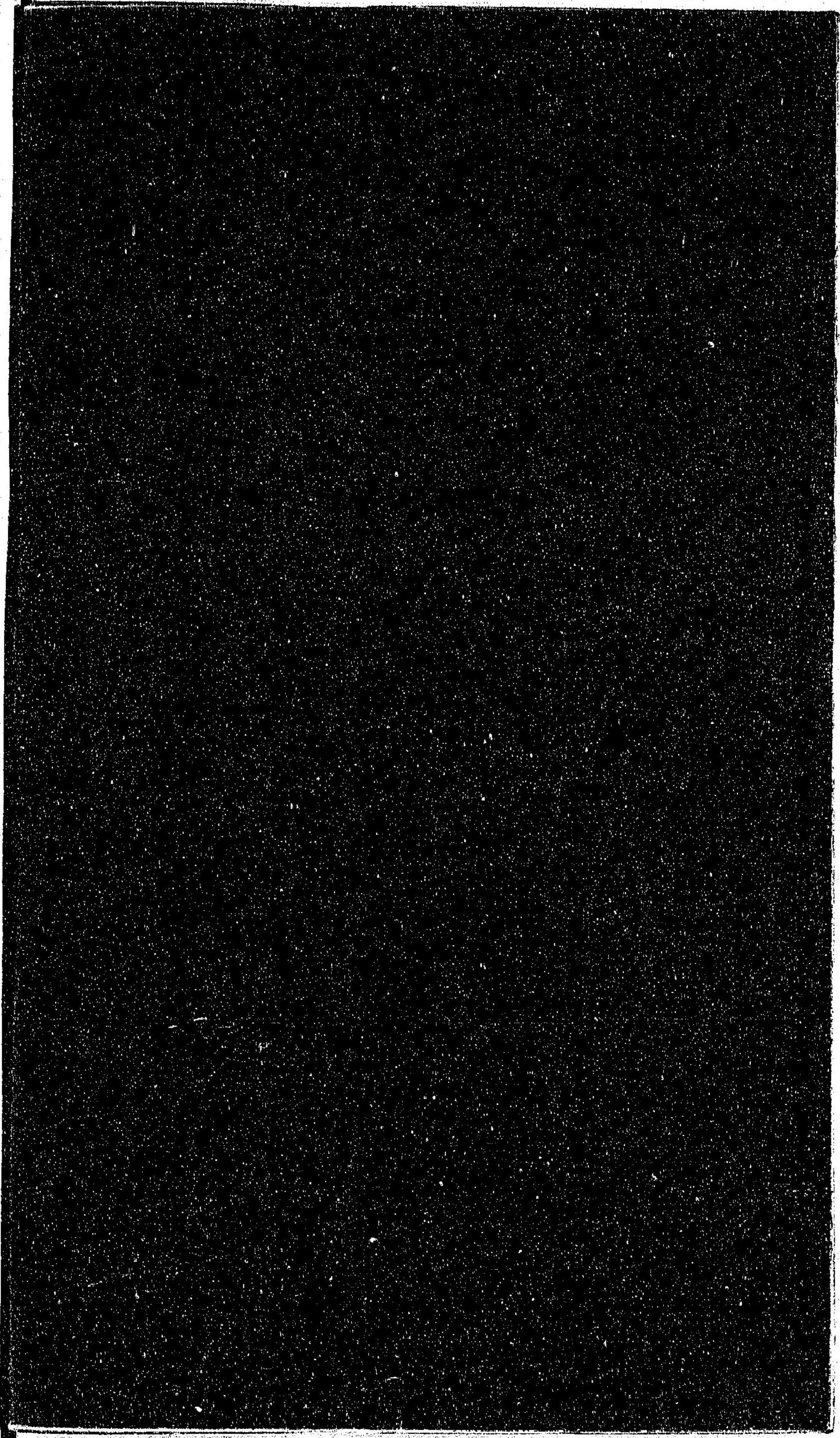
為
友
道

梅井為友書



平
吾
夢
輝

公
園
藏
友





朋少

皇言詩角



一 小 衣 目 弄 也



皇言詩角

明少 齋

一 小 衣 目 弄 也

松井惟利 輯録 單語篇諺解

數

此印の下へ記したるものハ西洋の數字なり

〇 〇と〇の間の數の多の所へ記したるものなり

二 二と二を合せると四よりなり

四 四と四を合せると八よりなり

六 六と六を合せると十二よりなり

八 八と八を合せると十六よりなり

十 十と十を合せると二十よりなり

一 一數の始又物の二と多のものと云ひまふ即ち富士山日本一の山ありと云ふが如し

三 三と三を合せると六よりなり

五 五と五を合せると十よりなり

七 七と七を合せると十四よりなり

九 九と九を合せると十八よりなり

百 百と百を合せると二百よりなり

千 千を十合せると千よりなり

十萬 十を十合せると十萬よりなり

千萬 千を十合せると千萬よりなり

十億 十を十合せると十億よりなり

千億 千を十合せると千億よりなり

萬 千を十合せると萬よりなり

百萬 百を十合せると百萬よりなり

億 十を十合せると億よりなり

百億 百を十合せると百億よりなり

兆 千を十合せると兆よりなり

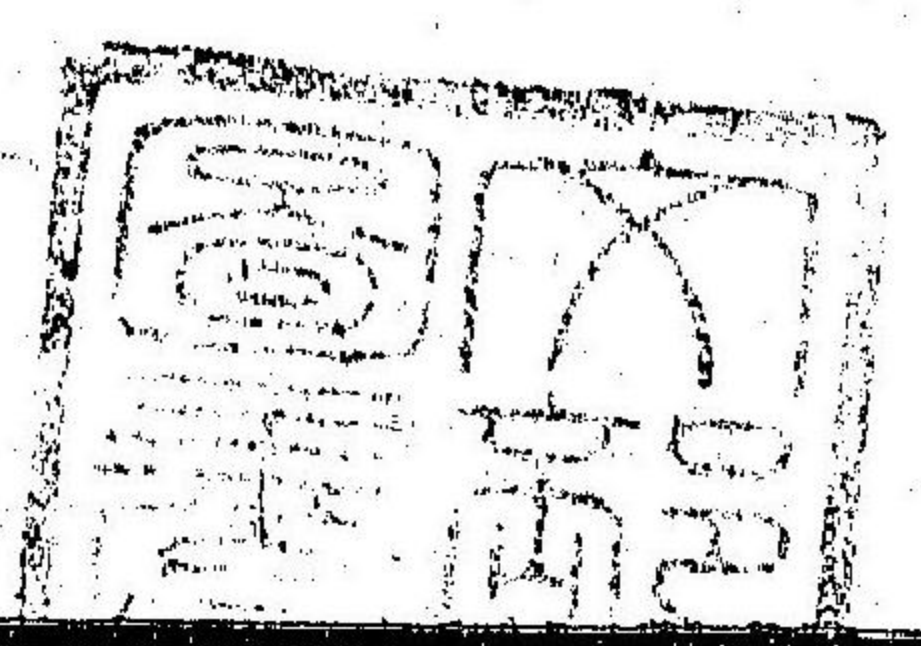
度數

丈 一尺を十寄せると一丈よりなり

寸 一寸を十寄せると一寸よりなり

尺 一寸を十寄せると一尺よりなり

分 一寸を十寄せると一寸よりなり



單語彙編

ハルノ...

釐りん 一分を十よりのものが一厘をわらうもの

毛もう 一厘を十よりのものが一毛をわらうもの

里り 三十六町を一里とわらうもの

町ちやう 六丁間を一町とわらうもの

間ま 六尺を一間とわらうもの

量數

ハ五穀流動物等の多き
少きを計る名あり

斛こく 十斗を一斛とわらうもの

斗と 一斛を十よりのものが一斗とわらうもの

升しやう 一斗を十よりのものが一升とわらうもの

合ごう 一升を十よりのものが一合をわらうもの

勺しやう 一合を十よりのものが一勺とわらうもの

抄せう 一勺を十よりのものが一抄とわらうもの

撮さつ 一抄を十よりのものが一撮とわらうもの

圭けい 一撮を十よりのものが一圭をわらうもの

衡數

ハ物の輕さ重さを計る名あり

貫かん 一匁を十よりのものが百匁を十よりのものが一貫目とわらうもの

匁もん 一分を十寄せれば一匁とわらうもの

分ぶん 一匁を十よりのものが一分をわらうもの

釐りん 一分を十よりのものが一釐とわらうもの

斤しん 百六十匁と一分と云ひます又西洋のものハ百二十匁と一分とわらうもの

兩りやう 一兩は百六十匁と一分と云ひます通例四匁五分の目方と一兩と云ひます

貨數

ハ金銀を計る名あり

圓えん 百錢で一圓とわらうもの

錢せん 十厘で一錢とわらうもの

半錢はんせん 一錢を十よりのものが半錢と云ひます

釐りん 一錢を十よりのものが一釐とわらうもの

歴數

ハ天地及び象眼を計る名あり

單語彙解

ハ公園蔵本

度 地球の周圍を三百六十に割るその一分と云ひます
一度と云ひます

分 一度を六十に割るその一分と云ひます

秒 一分を六十に割るその一分と云ひます
一分と云ひます

時數 多し時や日と計る名あり

日 二十四時と一日と云ひます

時 六十分時と一時と申す

分 一時を六十に割るその一分と云ひます

秒 一分を六十に割るその一分と云ひます

田數 地積の大小を計る名あり

町 十段を一町と云ひます坪數よまれば三千坪より多し

段 十畝で一段より多し此坪數は三百坪より多し

畝 一段を十ふりより多しものを一畝といひます坪數よまれば三十坪より多し

歩 一間四方より多し又あつとを一坪と云ひます

方 天地間のあらゆる物
の方向をいふ

東 日の昇ると見ゆる方と東と云ひます

西 日の没ると見ゆる方と西と云ひます

南 東へ向ひ右の手の方と南と云ひます

北 東へ向ひ左の手の方と北と云ひます

乾 西と北の間を云ひます

坤 南と西の間を云ひます

巽 東と南の間を云ひます

艮 北と東の間を云ひます

上 何品をも空の方へ向ひ上と云ひます

下 何品をも地より下と云ひます

左 東へ向ひ北の方と左と云ひます

右 東へ向ひ南の方と右と云ひます

前 人ふりて云へば顔や腹の方と前といひます

後 人ふりて云へば背の方と後といひます

中 一尺あるものより五寸の所を中と云ひ
まほ

端 物の盡る所を端と云ひまほ

形 諸物品の有様即ち模様を云ひまほ

角 縦線の端と横線の端と出合ふ所を角と云ひまほ

丸 手球の形の中なるものを云ひまほ

三角 ミツの直線より出来てミツの角と云ひまほ

菱 四角な物を少くもやうある形を菱形と云ひまほ之は草の實の形なりまほ

長 間のびらうと云ふものつゞきと云ふと長と云ひまほ

短 物の丈の長うと云ふと短と云ひまほ

高 上へ見上る様子を高くと云ひまほ

低 下へ見おろす様子を低くと云ひまほ

曲 真直であつたものと曲りと云ひまほ

直 少くも曲りあつたものと直と云ひまほ

薄 物の厚くあることを薄くと云ひまほ

厚 物の薄うと云ふと厚くと云ひまほ

縦 樹よりたゞと云へば幹を縦と云ひ枝を横と云ひまほ

横 縦よりたゞと云へば横と云ひまほ故に枝道を横と云ひまほ

廣 かつやうと云ふやうにひろくを廣くと云ひまほ

狭 狭うと云ふやうに狭くと云ひまほ

太 細くあるものと太くと云ひまほ

細 太くあるものと細くと云ひまほ

尖 錐の先のやうな所を尖りと云ひまほ

楕圓 圓のやうな形を楕圓と云ひまほ

色 濃薄善悪とも人々の眼目と云ひまほ

青 雲のやうな空の色を青くと云ひまほ

黄 金のやうな色を黄くと云ひまほ

黒 石炭のやうな墨のやうな色を黒くと云ひまほ

白 雪のやうな色を白くと云ひまほ

赤 血の色や朱の色のやうな色を赤くと云ひまほ

紫 紺と藍を交ると紫と云ひまほ

緑 青色のよと緑と云ひまは
○大陽七色の一

鼠色 黒と白と交れハ鼠色が出来まは

萌黄 黄と藍を交れハ萌黄よりまは

花色 藍色を云ひまは

茶色 赤と黄と鼠と交れハ茶色が出来まは

柿色 赤と黒と交れハ柿色よりまは

濃青 紺より薄く浅青より濃きものと濃青
と云ひまは。大陽七色の一

浅青 浅黄より濃き色と浅青と云ひまは
○大陽七色の一

紺 藍と紫と交れハ紺が出来まは
○大陽七色の一又紫色と云ひまは

浅黄 藍と白と交れハ浅黄よりまは

鶯色 赤と黄と黒と少し交れハ鶯色よりまは

桃色 紅花や猩熊紙(白と交れハ桃色よりまは)

藕合 紫と白と交れハ藕合よりまは

樺色 黄色と赤と交れハ樺色よりまは

鶯茶 緑と樺と交れハ鶯茶よりまは

海老色 紫色と樺色を交れハ海老色よりまは

紅 ハ紅の花や茜や猩熊紙や洋紅などの色を
云ひまは

鶉色 赤と白と交れハ鶉色が出来まは

鶉色 萌黄と鼠と交れハ鶉色よりまは

朽葉色 黄と赤と鼠を交れハ朽葉色
が出来まは

鉛色 黄と赤と交れハ鉛色よりまは

生壁色 紫と緑を交れハ生壁色よりまは

橙色 黄と少し赤と入ると橙色が出来まは

猪肝色 薄き茶(鼠)と交れハ猪肝色が出来まは

天文 日月星辰雨露霜雪
等のこと概都て云ふなり

日 光りと熱を萬物に與るものなり

月 日の光りより少く輝き一年十二度地球
の廻りを繞りまは

星 空に數多く光り輝て居る体と總て星と云ひ
まは

風 空気の流動で何れも又熱と受れハ空気が
軽く多くなると揚り其跡(他の空気が流れ来
るを風と云ひまは)

雨 雲冷て水となり地に降る是を雨と云ひまは

雷 電よりなる響きと電気の發動と
不依て出来まは

電 電氣發一動いづ雲より雲に至りて火を發せ
是を指光りと云ひま

雲 水氣の昇り集りて凝りたるものなり
ま

霧 寒きの為水氣の地の上を直ふ雲の様
ありたるものと霧といひま

露 水氣の蒸騰夜の冷気より水に葉等に
凝りたるものと露といひま

霜 華氏の寒候計三二度より以下の寒
よりなるものと霜といひま

雪 水蒸氣の寒きの為小固り花の形より
地に降るものと雪といひま

氷 水の寒きの為凍りたるものと氷と云
ま

霰 雨の空中より氷りて粒となり地に降る
ものと霰と云ひま

火 通例石と金を摩擦して取らるものと
又空氣を燃らしたるものと云ひま

煙 燃るものより立昇る所の蒸發氣と
て煙と云ひま

南極 地球の南の端と南極と云ひま

北極 地球の北の端と北極と云ひま

日蝕 地球と太陽の間へ月が繞り来て太陽の
光華を遮るるものと日蝕と云ひま

月蝕 日と月の間へ地球が繞り来る時
月蝕と云ひま

暈 空の冷で氷りて日月の光りのまわりの
ま

虹 雨氣日光より反射して出来るものと
虹と云ひま

雹 雨の氷りて其大ありのふりて田畑を荒
らする

霰 雨と雪と交わり降るものと云ひま

晴 少くも雲もた空を晴天といひま

曇 雲が出て太陽の光華を覆ふ空を曇天とい
ひま

陰 物より太陽の光華を遮るるものと云
ひま

日向 太陽の光華の照る所を日向と云
ひま

霖 三日以上降り幾日降り降る雨を霖といひ
ま

夕立 晴空の急な雲立て降りたる雨を夕
立と云ひま

時令 春夏秋冬及び昼夜寒暑
等類をまゝと云ひま

時令 春夏秋冬及び昼夜寒暑
等類をまゝと云ひま

春 植物の生長する季候と春といひま又北半球
は三四月を春といひま

夏 六七八月の三月を夏と云ひま又日が真直
なり尤も暑き季候をいひま

秋 年の第三の季候と九月十月の三月を秋
と云ひま

冬 寒い季候と冬と云ひま又北半球は
十一月より二月の三月を冬と云ひま

閏 三百六十五日二分五厘より地球と太陽と二週を
一年とす三百六十五日より四分五厘より二週を
一年とす其年の月の未だ此年を閏年と云ひま

暁 今よ夜の明けゆく時を暁と云ひま

朝 夜より晝より日の出る時を云ひます

晝 日の出より日の没する迄の間を晝といひます

一昨日 今日より二日前の日をいひます

今日 今夜の明けの日を今日といひます

明日 今日より一日あつた二日のことを明日といひます

寒 地球が太陽の遠くと繞る時節と寒を云ひます

涼 暑のまもなくあつた時を涼を云ひます

正午 日が其地の最頂点に當りし時と正午を云ひます

夕 晝より夜に移る時をいひます

夜 日没する迄の日の出る迄の間を夜といひます

昨日 今日より一日あつた二日のことを昨日といひます

明日 今日より一日あつた二日のことを明日といひます

暑 地球が太陽の近くと繞る時節と暑を云ひます

暖 寒くもなく暑くもなく程の時候を云ひます

冷 段々寒くもする時と冷氣を云ひます

黄昏 日の没する跡の赤く薄明るる時と黄昏を云ひます

四季 地球の繞る道の形故に日の光りかゝる地球へ斜に映りたる真直に射つたる光の四季節の時候が出来ま

前月 過ぎ去る月を云ひます 仮令ハ當月が二月より一月のことといひます

地理 海山村里田畑等の類を地理といひます

水 酸素と水素より出来たるものをいひます

國 大洲或ハ大島を幾つに分け其一分を一國といひます

府 人々の集まる所を府といひます

山 土石などの多く集りて平地より高くあつたるものをいひます

峯 山の尖りたる高い所をいひます

本月 現在の月を云ひて即ち當月と同じ

下月 未だ来らざる月を云ひます 仮令ハ當月が一月より二月のことといひます

土 水などの集りて草木と生むるもの

郡 國を幾つに分け其一分を一郡といひます

縣 田舎など人々の多く集りて所を縣といひます

谷 山嶺と嶺との間の卑き地をいひます

坂 向う上りの道を坂といひます

單語辭解

山松園藏板

嶺 山道を峠と云ひまゝ

川 湖水又ハ山の間をより出て海へ入る水の流まる所を川と云ひまゝ

澤 地低く水を溜り水草等の生ぜし所を澤と云ひまゝ

堤 土を築て水を遏むる所を堤と云ひまゝ

溝 悪水等を為し地を細く穿ちたる所の溝と云ひまゝ

瀧 山や高い所より低い地へ急し落る水を瀧と云ひまゝ

島 四方より水と取巻たる小き陸地を島と云ひまゝ又大方大陸よりつたたる半島と云ひまゝ

濱 陸土の海は長く公たる水際の地を濱と云ひまゝ

海 大洋より分れて陸に近づたる所を云ひまゝ

港 船の碇泊するよ都合よく其川岸に荷と運ぶよ都合よく人の多く集る所を港と云ひまゝ

池 地を穿ちて水を集めたる所を池と云ひまゝ

橋 木又石より川の上下へ一通行の便利を越す所の物を云ひまゝ

堀 溝より中深く且深く地を穿ちたる所の堀と云ひまゝ又船などを通するやうな地を穿ちたるを堀割と云ひまゝ

波 海川の水風の為し高低をままと波と云ひまゝ

浦 曲りこむ風船の隠る所を浦と云ひまゝ

村 二郡を幾つふり割りたる村と云ひまゝ

里 一村の中より家の幾軒も揃たる所を云ひまゝ

町 商人の多く集り住む所を町と云ひまゝ

圃 野菜などを作る所を圃と云ひまゝ

林 樹木の多く生たる平地を林と云ひまゝ

野 草の満たる平地を野と云ひまゝ

井 八地を穿ち底の多し桶をいせし土の崩れを穿ちて常に水を求めたる所の穴を云ひまゝ

湖 四方を全く陸土を圍み其中より水の溜りたる所を湖と云ひまゝ

沼 八池の類より大なる沼と云ひまゝ

市 八々の諸方より集りて諸物と商賣する所を云ひまゝ

田 稻を作る所を田と云ひまゝ

森 林より多く樹木の繁茂したる所を森と云ひまゝ

岡 常より小高き所を岡と云ひ海川に對しては陸地を岡と云ひまゝ

道 八總て人々の往来する所の總名を道と云ひまゝ

泉 土の中より湧出たる水を湧出たる所を泉と云ひまゝ

麓 山の裾を麓と云ひまゝ

岸 海川と陸土の高き界を岸と云ひまゝ

難語詳解

川松園藏

單語讀解

川村園洲

岬 海は突出する平地でゆるぎ

曝 田の中の廣き道を曝と云ひます

畔 田の界を云ひます

津 水の水の會する所を云ひます

洲 水中の小高き所を洲と云ひます

潮 日月の引合で一日に二度や満干と云ふもの

瀉 海辺の平地に波のき引のゆる所を瀉と云ひます

巖 石の粗ゆゑ尤も大なるものを岩と云ひます

石 土や礫物の總稱と云ふものと云ひます

砂 石のまじり細いものを砂と云ひます

泥 水と土と混合したものなり

樋口 水と水と溜り又水と流すとの自在

小路 街道より分れたる小道を小路と云ひます

街道 公道と同しを云ひます

水柵 木竹を排て水を障るものと水柵と云ひます

浮標 海の淺い深いを知らるる為のきり

入江 海水の陸地へ入り込まる所を入江と云ひます

暗礁 水面より見えざる海中の岩を暗礁と云ひます

開墾地 草木瓦石等の多くある地を切り開く所を開墾地と云ひます

鐵道 土中へ横に材木を並其の上へ蒸気車の輪の這入る鐵の棒二本並ぶものを有る

居處 宮殿樓閣家居等と總て居處と云ふなり

宮 天子の家と宮と云ひます

殿 高貴の人此家と殿と云ひます

樓 高く上へ組上る所を云ひます

城 堅固に築て敵を防禦する所を城と云ひます

廳 訴訟を取るる所を廳と云ひます

驛 宿場のことを云ひます

邸 人々の持分がけの地を邸と云ひます

宅 人々の寒暑又雨露と凌ぐ為の隠れ所を云ひます

店 品物と總て商人家の前面を店と云ひます

倉 米穀を貯る土藏を倉と云ひます

單語讀解

川村園洲

廐 馬を飼く置く所を廐と云ひます

門 邸前へ建て出入を掌るものでありま

戸 木と横を造り之は板と張りて門口等

庭 草木等と植る家の前の所を庭といひ

社 神を尊と祭れる家と社と云ひます

寺 佛像を安置し又僧尼の居る所を寺と

棟 棟ハ梁の上よりつく家根の形と造る木

梁 棟をより為は横と渡りたる木と梁と云

柱 材を四角ふ造り家の四方及び入口の左右

椽 棟より下へ斜に取付たる小き角材と椽と

瓦 瓦ハ埴と埴の形と造り竈に入れて松の枝

壁 細く竹を割て編み其上へ泥を塗り風雨と禦

垣 竹を割てのまゝと押縁へ編みつ内外の見え

屏 柱を建て貫をぬれお通し外面より板と張り

窓 空気が入ると又太陽の光りと取る為の家は都

天井 屋根の裏の見えざる様と張り

敷居 木へ溝と穿ち戸障子とをめるもの

鴨柄 敷居より深く溝と木へ穿ち敷居の上

障子 木へ縁と造り中へ格子と組み是は紙と張

簷 家根の終りたる所と簷といひます

廡 家根の先へ又家根と出たるを廡といひます

椽 家の前の廡の下の板敷を椽といひます

屋根 薄き板と並草と或は其上へ瓦と葺て雨

臺 四方の能く見えろ高き所と臺といひます

戸棚 家の中より造り中へ棚と架し諸物を入れ

廊下 此家より彼家へ行く為の道よりなる所

土藏 丈夫なる家の如く造り壁と厚くつ分入口を狭

穴藏 地を深く穿ち廻り木或は石を堅固め上

湯殿 身体を洗ひ清むる所を湯殿と云ひま

厠 八重隠しを織れ所と舐く清潔なまると注

馬立 門前又八門外等へ馬と繫ぎ置く所

牢獄 官の捉み者なる人を捕へり置く格

長家 人々の集り住居する長き棟の家を長
屋といひます

二階 平家の上より又家のつらつらと二階と云
ひます

煉化石 八埴と灰を雜て練り竈に入れて焼
き家と造るものなり

桁 柱より横より出て簷や廡などの折と
けり 腋木であり

欄杆 二階又ハ棟廊下などより外へ落ぬ為
横に渡したる手まりなり

羽目板 壁を崩れ易き所を板とて板とて
張りたるものを羽目といひます

人倫 男女父子及び農工商等と
總て人倫と云ふなり

天子 一大洲一大國中於て一をん位の貴
き天子と云ひます

華族 士族の上より居る華族といひます

士 華族より次く所の人を士と云ひます

卒 士より次く所の人を卒といひます

君 高位の人をさして君と云ひます

民 農工商をさして民と云ひます

男 鳥類より雄と云ひ獸類より牝と云ひ
對して男といひます

女 鳥類より雌と云ひ獸類より牝と云ひ
對して女といひます

夫 男女配偶したるを夫婦と云ひその女より男
をさして夫と云ひます

婦 夫と持たる女を婦と云ひます

父 我を教へ我を育て我を養ふものを父といひ
ます

母 我を産み我を愛し我を育てるものを母と
云ひます

子 夫婦の中より生れたるものを子といひます

孫 子の子と孫と云ひます

兄 父母より同じく已より先へ生れたる男と兄と
云ひます

弟 父母より同じく已より後へ生れたる男と弟と
云ひます

伯父 我父の兄弟と云へて伯父といひます

伯母 我父の姉妹を伯母といひます

叔父 我母の兄や弟を總て叔父と云ひ
をぢます

舅 夫や妻の父を舅といひます

甥 我兄弟の男の子と甥と云ひます

農 田畑を耕耘するもの總て農といひます
ノウサキ

商 諸物の賣買をするもの商人といひます

高祖母 祖母の母と高祖母と云ひます

祖母 父母の母と祖母といひます

妹 父母と同くして我より後産れる女と妹と
いひます

叔母 我母の姉や妹を總て叔母と云ひ
ます

姑 夫や妻の母と姑といひます

姪 我兄弟の女の子と姪といひます

工 家屋を造り或は橋梁を架する等の職人
をいひます

高祖父 祖父の父を高祖父といひます

祖父 父母の父を祖父と云ひます

姉 父母と同くして我より先産れる女を
姉といひます

曾孫 孫の子と曾孫と云ひます

玄孫 曾孫の子と玄孫と云ひます

妾 年限を定めて子孫を養育せしむる為に雇
ひたる妻といひます

兒童 三四才より十二三才迄の男と兒童と云ひ
ます

僕 年限を極め雇ひて使役する男と僕といひ
ます

弟子 手習學問其外色々のことと師に従てまゝ
習ふものと總て弟子と云ひます

歩兵 歩行を小銃を携帶し一隊を率て戰場へ
向ふものと歩兵といひます

巡查 晝夜市街を巡行して人民の安全を助る人
を巡查といひます

妻 一生寢食をともに家事を任するものと妻と
つまといひます

臣 君を奉仕する所のものを總て臣といひます

婢 年限を極め雇ひて使役する女と婢と云ひ
ます

師 手習ひ學問をせしめ諸事を教ふる人を師
といひます

騎兵 馬を騎り銃を携へ隊列して正に戰場へ
向ふものと騎兵と云ひます

醫 人の病氣を診察し快復を助るもの医
者といひます

養子 人の子を取りて我が家督を譲るま
じの養子と云ひます

身體 總て五体中より關する所の
その現身體と云ひます

頭 面の上より後へみそ毛髮の生たる所と云ひまは

面 鼻目口のわら部分と云ひまは

口 ハ物と喰う声を出したる為の面より穴でりうま

鼻 面の中央よりあつて専ら鼻くこと掌う又音声を助るものなりうま

耳 左右ニツらつて専ら音声等と聞て掌るものなりうま

目 左右ニツらつて専ら視る事と掌るものなりうま

眉 ハ左右の眼の上より生たる毛なりうま

舌 ハ食物と卷制し又物の味と別ち又鼻より声節と程能くするものなりうま

髪 頭部より生たる總ての毛と髪といひまは

髻 口のより上より腮の辺に生たる毛と髻といひまは

腹 五臓六腑のあつて所と腹といひまは

背 腹の後を背といひまは

手 ハ左右よりあつて我が思ふ通り小働るものなりうま

足 行走し或は躍り或は蹴る事と掌るものなりうま

指 物を取り或は捨て或はつかう或は摘むことと掌るものなりうま

爪 筋の餘りあつて諸指の尖頭より甲板爪と云ひまは

腰 人体の中部より背の下は方と腰と云ひまは

肩 左右の手の番ひ目の辺を肩といひまは

腕 手頭の下より腕とてう所の辺を腕といひまは

臂 ハ手の曲る所の外面でりうま

腿 ハ左右の足の尤も上部の内面の肉の多き所なりうま

膝 足の曲り目の外よりあつて所と膝と云ひまは

唇 ハ口の廻りよりあつて歯と覆ひ物と食ふことと舌の調子と助けるものなりうま

齒 口中の上下より生くる白く堅きものでありまは

牙 口中の齒と並びて食物と嚙碎くものなりうま

齧 齒を生むる所の筋肉と齧といひまは

領 ハ頭と背中の間の細き所と即ち喉の後より當る所と領と云ひまは

喉 喉の腮の下より領の前の所と云ひまは又此中より食物の通る所と呼吸の出る所の二の宛が有まは

乳 乳を男女とも胸の左右よりりうま

臍 胎衣を切ら跡の所を臍といひまは

掌 手頭の外面と手の甲と云ひ又内面と掌と云ひまは

踵 足の後部の端の皮は厚き所なりうま

單語講義

小松園藏板

肋 胸の下より左右より集り並び骨を助と
つひま

心 肋の中よりつゝ血を造り送り出まると
つひま

脾 肋の下に左の方よりつゝの老總て食物を消化する
為に腸へ送る水と痔とをのぞくつひま

腎 腸より背骨の下に腰の方よりつゝ小便と痔と
の器械をのぞくつひま

腸 十二指腸と通る大便と通る働とるまると
つひま

衣服

袴 袴の衣服の上の方へ前より交る様は仕立
風寒を凌ぐものなりつひま

袴 袴の衣服の下端よりつひま

胸 肋骨の上部と總て胸といひま

肺 肋骨の中よりつゝ空気とせみひ或は吐くことと掌
ののぞくつひま

肝 肋の下右の方よりつゝ脾膽及び脾等と共に同
ト働するものなりつひま

膽 肋の下を肝よりつゝ胆汁と交る黄の水と造
るものなりつひま

胃 肋の下に真中よりつゝ食物を消化する道
具なりつひま

袖 袖の衣服の左右よりつゝ手と腰ふまのぐ
つひま

直垂 練縮と以て仕立紐糸と附て前と結
ぶものなりつひま

帯 帯の織物と仕立体の中部は於て衣服を固
着するものなりつひま

袴 綿と入れあふ衣類をのぞく又都々表へ
裏とつひまの袴といひま

枕 桐又は他の木と造り其上切れて造り
小枕とのを寝る時天頭の臺にする物と有ま

笠 竹と其形を造り竹の皮と夾で雨の降る時
冠するものなりつひま

草鞋 藁を打ち造り足は藁と付けもの
なりつひま

履 皮と造り足は履くものなりつひま

烏帽子 紙を折て造り其形は官位の等級
に依て色をのぞくつひま

蒲團 絹木綿又は縮緬と仕立中へ綿と多く入
る寝る時下敷くものなりつひま

袴 夏の單と冬の裏とつゝ共に取仕立
の処に紐をめるものなりつひま

衾 麻又は縮と仕立暑さの時か著るもので
なりつひま

蚊帳 萌黄色の目の粗き麻と四角は仕立家
の内は釣て蚊を防ぐものなりつひま

簾 藁を打ち造り是を編と造り雨を禦
るものなりつひま

傘 竹と造り其下紙と張り葎の油と引と雨
天の時用ひるものなりつひま

冠 官位を表すものなりつひま

夜着 絹木綿又は縮緬等と仕立夜に寝る
時用ひるものなりつひま

羽織 羅紗木綿縮と短く仕立衣類の上
へ着て前と紐と止るものなりつひま

半天

其丈羽織より短く又領られ共外へ返る職人の上着て目印とあるもの有る

莫大小

木綿糸を以て編み手へてめ寒く凌ぐもの有り

手拭

木綿の切手紙を以て手拭ひ又も身体を洗ひ清むる時用ひたるもの有り

草履

ハ藁又ハ竹の皮より造り鼻緒を以て足より上を覆ひたるもの

下駄

ハ桐より蓋と造り木二枚の堅木を以て蓋と雨中の往來の助とすもの有り

襦袢

ハ木綿縮緬等より仕立肌直み着るもの有り

浴衣

木綿より單小仕立浴衣後より着るもの有り

布帛

多衣服より用ひべき種々の織物と都て布帛といふ

足袋

木綿又ハ絹より仕立足より覆ひたるもの有り

釧

ハ角又ハ金を以て造り總ての洋服に附るもの有り

頭巾

ハ絹縮緬又ハ絹より仕立頭より冠り寒く凌ぐもの有り

雪踏

表ハ畳より造り裏ハ草を以て踏天より履くもの有り

脚半

木綿より仕立腰又ハ足首より膝迄の間を纏束もの脚半といふ

合羽

ハ羅紗呉那又ハ木綿より仕立て雨より濡れが為より上を覆ひたるもの有り

木履

桐の木を裏と穿ちて蓋とを以て上面へハ鼻緒を以て足より履く物なり

絹

繭の糸を以て織りたるもの

花布

金糸を以て模様と染めたるもの花布といひます

縮緬

糸を紡いで織りたるもの伸縮するもの

紗

ハ綿より似たれども其織目粗く薄くもの有り

羅紗

羊の毛を用ひて厚く織りたる物なり

綸子

紗綾に似て厚く地文稻妻の如く花を以て織りたるもの有り

縹子

地厚く滑く光澤の有りたるもの有り

錦

多色の糸を以て文章を織り出たるもの有り

布

絹や木綿を以て織りたるもの

木綿

綿を以て織りたる糸を織りたるもの木綿と云ひます

紹

ハ織目粗くく晴のゆうあれども紙らさ其の羽織より宜いもの有り

天鵝絨

ハ横に鉄線を通りて織り是を按て跡と切りたるもの有り

金巾

唐糸の細き糸を以て織り地合平より薄く巾の廣きもの有り

緞子

ハ大緞子小緞子の二通り其地合厚より美に織文の有りたるもの有り

縹珍

緞子に似て糸の粘り少く赤黄を以て交ぜ模様を織りたるもの有り

金襴

ハ金線五彩の糸を以て織りたるもの有り

紗綾 地合を稲妻の如く又菱端のやう織りたるものなり

繭紬 繭の類より煉竹色のものなり

上布 縮の一段上品ありのうと薩州より出るものなり

唐棧 唐糸を以て色々の嶋を織りたるものなり

縮 紬を績み紡ぎ鳴又ハカスリと織りて惟子に仕立たるものなり

改機 其地合羽二重より又平より薄く重み西洋傘と張るものなり

飯 米と水を入りて炊たるものなり

餅 餅米を蒸し臼杵を用いて搗きたるものなり

鹽 海水を汲みおろし煎して食用とするものなり

醬油 大豆と麦麴と塩と入れ後搾りて用ゆるものなり

粥 米と水と入れて飯よりゆるく煮上げ物なり

湯 水と火より熱く温度を興へたるものなり

味淋酒 餅米を蒸し是を麴と加へ造るものなり

團子 米の粉を練りて団形くまらぬものなり

麴 米を蒸し葉と入れ籐の葉は灰汁をついて攪拌し空室へ入れて置く麴なるものなり

綿 綿の端の緒を引て糸となり是を以て織るものなり

麻 紬を紡ぎ織り曝きたるものなり

羽二重 縮を織り地合薄く平らふり上品なる物なり

毛氈 毛を以て織るものなり其色赤きを常とす又草花等と染るものなり

晒布 麻を細く緝り織り春き晒し其色白く雪の如きものなり

綿 古終草の實の中を生たるものを取り之を如きものなり

酒 米と水と蒸し麴と入れ造るものなり

酢 米と蒸し是を冷し又玄米を蒸し加へ造るものなり

砂糖 甘蔗の莖の汁を採り煎して製するものなり

味噌 大豆を煮ておろし塩と麴と交へたるものなり

汁 味噌を摺り水と交へ其中へ諸物と入れて食用するものなり

油 魚類又草木の實と搾りたるものなり

焼酎 酒を蒸溜器より取りたるものなり

麴包 麥粉と水とを練り是を餅母と交へて焼くものなり

煙草 煙草の葉を干し刻み煙管に挿し吸ふものなり

單言言角

小村園藏

饅頭 麥粉を酵母で蒸すに皮を中へ

羊羹 ハりんへんてんと加へて型に入れて持へ

器財

ハ日用の道具より農具武器戯具大工
左官の用うる道具等と都て云ふあり

紙 ハ楮の木を皮を取製するものなり又
西洋の葉や古切を製する

墨 多油煙と膠と練りたるは香詰すもの
入れ型へつめく持へん

筆 鹿や狸や兎の毛を結んで木や竹の軸と
て文字を書寫するものなり

硯 石を穿らて造り墨を盛るものなり

書 紙を折り之を表紙をついて綴り中色々の
皮を記しそのなり

畫 ハ人物草花鳥獸を紙や絹地に筆で取
物なり

算盤 ハ木の匣を造り一行六つ玉を置く
ものなり並べ筆用を盛る為用なるもの

曆 一年中の日没日出の刻限の差引等と
記したる本なり

印 ハ黄楊又は水牛を造り姓名等の下へ押す
證にたる大切のものなり

机 ハ其形種々あれども何れも木を造り書
字を盛る為用なる器なり

秤 糸を造り線鉄の薄き板を盛る
林のれ米や油や酒を計るものなり

衡 ハ木板の理より同一の物を以て物と
て其輕重を計るものなり

尺 ハ竹を造り曲尺と鯨尺とあり又鯨尺の
一寸が曲尺の二尺なり

貨幣 通用の金銀を貨幣と申す

札 金銀の證と爲す種々の模様を印したる
紙なり

錢 各種の丸れども其形丸く中へ四角の孔を
穿ら物とかなるものなり

碁盤 ハ銀杏の木を四角に切り四本の足を
上へ三百六十の目を作り黒白の石を置て勝
敗をなす戯具なり

雙六 造り白黒の駒を用て勝敗を決する
具なり

將碁 其形碁盤の通りあり共少く又目の
数ハ十一あり之の駒を用て勝敗を決する
戯具なり

鎗 ハ銅鐵の穂を造り木の丸く長き柄
つたる武器なり

刀 多銀を似て片又多のよて士の帯に
あり

旗 其形種々ありつれも目標とすもの
なり

大砲 青銅を造り海岸に備へ又軍艦に
専ら非常と防衛の器なり

小銃 鉄の筒を造り之を木の基を以て
を填て敵を防ぎ或は鳥獸を撃つ武
器なり

喇叭 其真鍮を造り兵隊に進退する為
くものなり

鞍 糸を造り馬の背に置て其上へ乗る
ものなり又西洋の鞍ハ革で造り

燈 鐵と木を造り馬に乗る時足
有る又西洋の燈ハ鉄の器で手
作り

手綱 糸綿又は革を造り左右の端を
附て馬を自在にする物なり

鞭 馬の骨又は竹の根又は竹を数本つらせ造りて半馬と鞭ち又之を以て物を差ホト教ふるのやうなり

舟 木と多く集めて造り水上に浮いて諸物の運送を専ら掌るものなり

蒸氣船 蒸氣の力を以て風を構はし進退を自由とする船なり

軍艦 龍骨といふ長さ木と基礎より丈夫に造り砲等と備たる軍艦なる船なり

帆 帆布といふ一種丈夫な布を造りて之を風を請て船を走らすものなり

碇 鉄より造り船を海中に安全たしむるの器械なり

尾 木より造り船の後方へ力を入りて船を左右する器械なり

棹 木又竹を以て重なる船の出入を助け又浅き所を以て船を進ませる物なり

槽 木より造り船の後方へ力を入りて船を進せる器械なり

車 木又鉄より造り諸物を運送する道具なり

鋤 其形鉄と同く只鉄の柄を曲げ鋤の真直は柄を嵌め深き穴を穿つ為の用なり

鋏 鉄より造り甲へ嵌めおの木の柄を以て田畑を鋏くものなり

鎌 鉄より造り其形ハノを曲て柄を嵌めたる如き物と麥草等と刈取るものなり

碓 石又土を丸き形に造りて重なる轉廻し米麥等と挽く物なり

鋸 薄き鋼鉄の歯を以て木の柄を嵌め木材を切る道具なり

鑿 鉄より造り木の柄を嵌め木材へ穴を穿つ為の用なり

釘 鋼鉄より造り曲りたる木の柄を嵌め木を研らる為の用なり

鉋 鉄より造り木の基盤嵌め木を正しく削る為の用なり

錐 鋼鉄より造り三稜或は四角に造り木の柄を嵌め釘を打つ等の用なり

釘 鉄又銅より造り木と木と木と固着する為の用なり

機 木より造り布と織る道具なり又木綿を織る下機と云ひ麻綿を織る上機と云ひ

糸 麻又麻綿等と製し友物と織り又衣類等と仕立るものなり

針 鉄より造り糸を通りて衣類其外の物と縫ふものなり

絲車 木より造り一方へ竹車とつひ一方へ紡錘をつひ綿より糸を引出す道具なり

網 麻糸とよまた高き小張り低き小敷と鳥と取海川に投して魚と捕ふるものなり

釣 其形縫針を曲たり如く是は餅とつひ魚を釣るものなり

畳 草葉と編み糸とを以て床と云ふ之を縁と云ふものなり

椅子 木より造り腰とつひの所は藤蓆なり

屏風 其形襖と二枚又ハ六枚を以てつらね物と同じく共風を防ぐものなり

庖丁 鉄より造り木の柄を嵌め魚類及び野菜等と切るものなり

俎 木の板二枚の足を以て諸物を切る為の臺なり

鍋 鑄鉄銅或は青銅より造り食物等と煮るものなり

釜 鉄又ハ青銅之造リ飯を焚キ又ハ湯を沸
マサ小用ものなり

膳 ハ木之造リ漆を以テ塗り食事の時の臺
ナリ

箸 ハ細キ木又ハ象牙等之造リ食事と助
ム

鉢 土之造リ外面ハ草花人物等と画キ其上
ハ藥と云ク焼キ食物等を入ルコト深キもの
ナリ

瓶 土を燒キ作り水又ハ其外の物を入
ルコト

杵 丸キ木ハ丸キ柄を嵌メ臼の中の物と舂
ク

鉚子 ハ銀又ハ鉄之造リ酒を入
ルコト

鏡 青銅之造リ上ハ水銀と塗テ容顏を寫
シ見ルコト有キ又西洋ハ硝子板の裏ハ水銀
と錫葉をついて用ケル

弓 ハ竹と木と鐵合せ造リ弦を以テ矢を射
ルコト

琴 ハ桐の木と中ハ空と造リこれハ三筋の糸と張
リ柱と云ク彈キ樂器なり

笙 ハ木之造リと造リ十二本の竹管と云ク又
口簧と云ク吹クものなり

琵琶 其形杓子に似テ轉手曲リ四本の糸を張
リ撥を以テ弾クものなり

團扇 細キ竹の半分と稱シ半分と割テ糸を
編ミ紙を張リ風と招キ蚊等を追
フものなり

提灯 其形ハ色々なり何れも中心ハ蠟燭と建
テ夜令の来往を助ケるものなり

蠟燭 燈心と真と造リまた蠟と云ク火を
燃マシメるものなり

炭 諸木と切り石又ハ土の竈に入テ燒テその
と炭と云ヒキ

竈 木之櫃を造リ其上土と築キ釜と云ク
飯を焚キ物と煮ルものなり

椀 ハ木之造リ漆を塗り飯汁等を盛ルもの
なり

皿 土之造リ上ハ茶と云ク焼キ食物等を盛
ル平多きものなり

桶 木と並テ圓く造リ竹之繩と云ク流動物
を入ルものなり

臼 丸キ木の中心ハ穴を穿チ此中ハ物と入れ杵
を以テ舂クものなり

盃 木之造リ漆を塗り其中ハ花鳥等と画キ
酒を呑ムものなり

杖 ハ木又ハ竹之造リ老人又ハ盲人の来往と助
ムものなり

劍 ハ其形刀に似テ反キ且ツ両又多きものなり
其形ハ

矢 細キ丸竹ハ鳥の羽とつク又其尾ハ鉄と嵌
メ射ル武器なり

笛 丸キ竹ハ穴と穿チ七ツの穴ハ両手の指
を以テ調子と云ク上の穴ハ口を以テ吹クもの
なり

大鼓 ハ木之造リ獸皮を張り撥を以テ打
チ

扇 竹と薄ク切テ骨と云ク紙と云ク糸を以
テ作り風を招クものなり

行燈 柱と云ク柱ハ紙と張り中心ハ火と云ク夜
燈の如ク用ケルものなり

燭臺 木或ハ金之造リ蠟燭と建ルものなり
臺と云ヒキ

新 諸木と切り竈に焚クと云ク薪と云ヒキ

剪刀 ハ鉄を以テ小刀と二本合セる様之造リ又
と云ク合セ物と切るものなり

髮刺 鋼鉄を造り毛髪を刺すもの

鑢 鋼鉄を造り目を刻み鋸の齒を利し又金属を削りつるものなり

轆轤 短き柱を建横木を設け車を以て此横木を轉し桃や錫の皿等を造るもの有り

釣瓶 八柄又箱を付て又八繩をつけ井戸の水汲むものなり

手桶 木を合せて造り桶を嵌め水を携帶するものなり

櫃 長持の類に其形小く下は曳出のりもの櫃なり

箱 糸を以て四角或は横長に造りたる物の總名なり諸物に仕舞置くものなり

蓆 藁を編むものなり

煙管 銀真鍮又鉄を造り竹のらを嵌め煙草を吸ふものなり

鍵 鉄を造り錠を明るものなり

箆筒 重し桐の木を造り引出しつ衣類其他の物を入れ置く為の物なり

笄 鬘甲又象牙を造り婦人の髻を挿すものなり

階子 木を造り二階或は高い所へ昇る時使用するものなり

箒 棕櫚の毛を造り家内を掃除するものなり

竿 竹を切り殺し拂つく衣類を干し用ひるものなり

火筋 真鍮或は鉄を造り火を銜するものなり

鑊 鉄を造り木柄を以て壁を塗る又土を掘るものなり

吹革 木を造り中へ裡の毛を張りたる木を以て進退して風を取るものなり

燧石 此石を鉄で摩擦して火を取りしるものなり

鹽 木を以て並べ桶を嵌め顔手足又衣類等を洗ふものなり

柄杓 木を削り又八曲物に柄をつき流動物と汲むものなり

葛籠 竹を編み上へ紙を張り漆等を以て衣類を入るものなり

簾 竹を割ておれ糸を編み門口等へ下るものなり

囊 布又紙を造り穀物等を以て運送するものなり

錠 鉄を造り其中に彈を以て箆筒長持或は土藏等の締りとするものなり

長持 重し桐を以て大きく長く造り夜具布團等を以て置くものなり

櫛 黄楊又唐木を造り髪を束る時使用するものなり

簪 重し銀を造り婦人の髻を挿すものなり

衝立 其形襖の如くして太き縁を以て下へ室を以て下間の中の隔とする物なり

箕 櫛の皮を割て竹を以て縛りて編み穀物の取を篩るものなり

火鉢 木又青銅を造り火を貯へ寒を防ぐものなり

鐵瓶 鉄を鑄て造り湯を沸かす為使用するものなり

藥罐 ハ銅又ハ真鍮より造り藥を煎ト又湯を沸かすものなり

槽木 ハ木を丸く削りて槽盆の中に入れおす時、用ゐるものなり

硝子壘 硝子を以て造り蒸発物を貯ふるものなり

時計 ハ時を計る器械なり又金銀等より造りたるもの、袂時計のひま

寒暖計 細き硝子の管の中の水銀の昇り降りにて寒暖を知る器械なり

電信機 エキカカニ以て遠の所直ニ音信を導ふるものなり

繩 麻又ハ麻とよめるもの、色々の用をあるものなり

蹴鞠 ハ草を造り足ふの鞠を以て是を蹴り場を遊ぶものなり

槽盆 ハ土を造り内面多くの線と穿ち諸物を貯ふるものなり

蒸露罐 ハ瀬戸物又ハ鉄を造り諸物を蒸らす其蒸発気を取るものなり

磁針 鉄の針の動くを見て方位を知る道具なり

晴雨計 水銀の昇り降りにて風雨を知る器械なり

望遠鏡 張れた筒の中五箇の玻璃鏡を以て造り遠の所を近く見る為の眼鏡なり

機關 蒸氣車及び蒸氣船時計等の仕掛と云ひ

紐 布を仕立又糸を組む物と結び又解くものなり

揚弓 ハ木を削りて造り矢を以て的を射る器具なり

煙火 竹や葎へ煙硝を以て之を火を点て小児の眼を驚かすものなり

紙鳶 紙へ字や画を以て竹を骨と造り風のまはしく高く揚る小児の玩具なり

風呂敷 ハ花布或ハ水綿を以て物をおむるものなり

金石 金銀銅鉄及び水晶馬瑙等の礦物をまじりて爰に入る

金 ハ其他物と一塊より造り礦山の中より出諸金の中最も貴き物なり

銅 ハ硫黄と一所を塊にて中より赤い色の金なり

鉛 ハ山谷の間より多く出る

玉 瑪瑙其外石の美しいもの、總名、其種類澤山あり

木偶 木や土を人の形を造りたる小児の玩具なり

獨樂 ハ木を造り中心に鉄線と軸と糸を以て小児の玩具なり

壺 土を焼て造り茶或ハ砂糖を入る貯るものなり

銀 金は次ぐ金属と云ひ、礦山より掘出さるものなり

鐵 ハ日用多く用ゐる物と云ひ、礦山より掘出さるものなり

錫 ハ鉛に似て堅く茶壺及び皿等を造るものなり

馬瑙 ハ石より、白赤の二種の物あり、黒白紅の三種あり

水晶 透明にして五角六角の積りし山中より採り出さるるものなり

琥珀 石砂の多き地より採出せる黄色なる樹脂の塊なり

玳瑁 玳瑁の形に龜の如く海洋の深き所より居む此甲を取て并みとて造りま

眞珠 腹の腹より取て藥と爲るものなり

水銀 其色銀に似て白く其質軽く天氣の平熱に因て好く流動するものなり

石炭 山中より採出せて蒸気船や蒸気車と動力爲るものなり

金銀箔 金や銀と紙の如く薄く延ぶるものなり

眞鍮 銅と亜鉛と雜會れし出来ものなり

赤銅 銅と金を混合れし赤銅なり

滅金 金と水と溶解しエキを用いたる銅を金色を付る滅金と云ひま

青銅 銅と錫と入りし青銅なり

磁石 鉄を蝕く引て其力を平均する石なり

穀菜

穀 穀菽豆 葷草等

粳 八稻の實より十月十月頃取て食用するものなり

糯 其形粳に似て田之色白く饒強飯及び酒造るものなり

粟 其性粘りと餅粟と云ひ餅を製し粘りものなり

黍 八五月頃時で九月末より取り取て飯と粥とを造るものなり

稗 其形黍粟と同一く田舎にて飯を炊き粉を挽て食用するものなり

大麥 其實小麦より大く皮薄く煮れれば甚滑り食用するものなり

小麥 秋種で冬長し春秀で夏実る粉と色々造りて食用するものなり

蕎麥 八年草を其実三種より十月頃之を取り粉を挽き食用するものなり

大豆 夏種を下す秋より白き花を開き菜の中実を結入取て豆腐と造りて食するものなり

小豆 枝葉共に隠元豆同く秋に至りて花を開き菜の中実を結入取て煮て食するものなり

豌豆 苗柔めて薄皮の如く四五頃花咲き薄皮色の莢の中実を結入取て煮て食するものなり

芥 九月頃種を下す四五頃黄なる花咲き莢の中実を結入取て粉を挽き食用するものなり

大根 四月頃種を畑に下し十月頃より煮て食用するものなり

葱 八葷草より畑を作り葉を取て食用するものなり

芋 四月頃種芋と畑に種れ九月頃その廻り新芋を生かすものなり

瓜 冬瓜白瓜等の總名なり

茄 八畑より作る蔬菜より夏より秋に至るまで藤色の花を開き実と結び食用するものなり

麻子 八小鳥より飼ひ又油とて油繪とて用ひるものなり

胡麻 黒白の二色ありまた其莖は四角なり秋白き花を開き節々実を結ひます

蜀黍 八形ち蘆ふ似て穂太き其実を食用に穂六等造り又席を織ります

蠶豆 其莢常の上に向く故名を炒りたり煮たりて食用にまします

綠豆 其實は小豆より小く色赤く皮薄く粉多きものを製しませ

嬰粟 秋種は冬よまて生じ其葉は嫩みて食用にまします又其實は甚だ細くみて白くあれも食用にまします

大角豆 形は小豆より大きくて強飯を食せざるべからざる

胡蘿蔔 其形大根に似て細く其色赤く味は甘く食用にまします

蕪菁 知れ造る葷草にて根も葉も共に食用にまします

芹 濕りたる地を生ずるものと乾きたる地を生ずるものとありて食用にまします

牛蒡 四月頃畑に造りて根を食用にまします

蕨 四五五月頃より山の間に生ずる柔滑菜として食用にまします

筍 竹藪に生じ其熟き時取れ嫩みて食用にまします

款冬 氷雪を恐れぬ葉は荷の如く其莖は四五六月頃より食用にまします

藜 八濕草にて其味辛く刺身など小添へて食用にまします

蓮根 池沼などの泥深き所に生じ紅白の花咲く又根は長く節あり中よ六七の穴あり食用にまします

蒟蒻 春苗として六月頃地に移し其根を取て灰汁を製し食用にまします

紫蘇 四五五月頃種を下し其葉紫を皺りて其實は塩漬で食用にまします

黃瓜 八蔓草として畑に造り四五六月頃より食用にまします

白瓜 四月頃種を畑に下し秋にかりて瓜を結び塩漬めて食用にまします

山葵 山中の水の近き石の間小生じ又人家中にも是を植へ其根を食用にまします

海苔 海中の苔より是を取ると海岸へ木の枝を建て取り濾して食用にまします

昆布 東海中の石に附て生ずるものと食用にまします

菌 八松茸初茸茸茸、榎茸、椎茸等の総名でけり又總て朽木及び老樹の根を以て濕生するものなり

咖啡 八刺樹に生ずる苞木の實にて其形櫻の實の如く之を取て皮を去り焙り碾き飲料にまします

菓類 五菓ハ更あり山味水菓の類等ハ皆此部を収む

梅 八衆木よ先立て花咲き其實酸く又塩漬け紫蘇の葉を加へて食用にまします

桃 夏桃、秋桃色々あり其中でハ秋桃が善き味なり

李 八冬花咲き夏實り其味酸く其の皮を剥き食用にまします

梨 八三月頃白い花を開き其実ハ水気多く甘き山菓なり

栗 五六月頃胡桃の如き花を開き其実ハ刺多き皮を剥き十月頃霜降れば熟し皮を破り落ち尤も味のためなり

柿 八色々あり其実青き時ハ渋く熟すれば赤くなり其皮を剥き食用にまします

柚子

枝は刺りて其花も実も白く高く熟まれば黄色なり其葉密排し同トクれども其味は酸き山菜なり

枇杷

葉の形兎の耳の如く冬は白き花を咲き春実を結ぶ其肉は薄く枝の太き山菜なり

林檎

木も多し其味酸く渋いゆへに多し

葡萄

春花也其実秋に至りて熟まれば紫色なり水気多く酸く其きのりなり

胡桃

其花は栗の花の如く其実秋に至りて熟し青桃の如く此皮肉を去り枝を取らば食用なり

山椒

三月頃白き花咲き六月頃枝葉の間実を結び其香の能きゆへに多し

草木

芳艸濕草及び蔓草の類又喬木の類も總て此部に入る

菊

五月頃根を別ち植れば九月頃花を開き人の愛するゆへに多し又黄菊は食用なり

桐

春花咲く後葉を生ずる木も琴又八簞筒長持等と造り多し

櫻

其花八重なり一重なりて實は百花の長なり

杉

其性正直に延るものゆへに人家に植て垣根と又山中にも多し

桑

畑に造る准木と葉を取て蠶と養ひ又茶の代り用ひ多し

漆樹

幹は枹の如く葉は楮の如く喬木と漆を取る木なり

牡丹

春に至りて大なる花を開き其色種々なり群花中の第一とて人の愛する芳草なり

海棠

山菜なり春の初に紅の花を開き其實は梨の如く櫻より次く美し花なり

檜

香水中の尤も良き材なり水より強く諸用あり

藤

五月頃紫色の敷花集て房となり下は美し蔓草なり

密柑

此木は枝は刺りて其実冬に至れば黄く赤く帯ひ包の中は穢あり穢の中は粒あり其味は酸く其葉山菜なり

銀杏

木も多し霜に遇へば熟し其味を取て肉を去り枝を食用なり

棗

六月頃花なり其実初め青く熟せば赤く多し食用なり又薬にもあり

柘榴

其実赤く黒き斑点あり皮の中は蜂の巢の如く黄膜あり之を隔て中子あり其葉の如く其色は薄赤く其味は酸く其葉山菜なり

椎子

其形は葦の頭の如く仁白く其味は炒て食用なり

慈姑

沼などの泥深き所に生ずる水菜なり其根塊は食用なり

松

氷雪と忍び四季其葉緑の色と目出度木なり

柳

枝弱く下へ垂れ春の始に花を持ち未至れば葉を生ずる木なり

楮

灌木なり四五月頃花を長く穂とて其皮は紙に製し多し

茶

野生なり種生なりとて小民生日用の資とあり味葉なり

芍薬

秋の末に花を咲かす春に至りて牡丹に似たる紅白の花を開く其根は薬に用ひる芳草なり

竹

木の一なり其種類多し又皮葉とも有用あり

柏

櫛の類なり其葉大きく又此葉を取て餅を包み多し

籐

黄白色なり大さ葉前竹の如く細く割て白肉を剥き椅子の腰を縫ふもの其外色々の物に編み多し

解語

小抄園藏

葛 ハ野生の家生の其蔓ハ紫色やて長く取
りて布と織る又其根ハ製して葛粉とす

菖蒲 四時青き水草を春不至れ芽を出
あやめ 黄色の花の咲のり

芒 ハ其形ち茅の如く秋に至て長き茎と抽んで蘆葦
花のやうな穂を生ずるものなり

萩 ハ八月頃紅又白き花を開く灌木なり

黄楊 山野人家より多く四時凋まら花咲き実
み其性堅く印形と彫る木なり

南天 ハ灌木多し草不似て七月頃白き花を開き
其實熟まれば赤くて美く故庭に多
多く植るものなり

朝顔 ハ六月頃より早天よ種くの色の花を
開く蔓草なり

葦 ハ葎の成長よりぬれ湿地に生ず枝多く竹
より似り人にて簾と造り

水仙 山草よて寒中白き花の咲く物なり

百合 ハ野生の家生の五月頃花を開く其葉ハ
短き竹の葉の如く其根ハ食用なり

躑躅 ハ其種類多く五月頃赤き花の澤山咲く
毒草なり

木賊 ハ水辺き地多く生ず冬凋まら寸毎節
の取木と碌擦ハ尤滑くあり

棕櫚 其葉ハ扇を開ける如く蠟燭を造り幹ハ
生ずる毛の取て箒又繩を造るものなり

椿 ハ山茶花に似て花の赤きり白きあり実ハ油
を取り

茜 ハ冬苗を生し秋に至て花咲き実結ぶ蔓草ハ
根を取て絳と染まる

萍 春に至れ池澤などの水面に浮遊葉の裏
に根を生ず繁殖するものなり

桔梗 多春苗を生ず秋に至れば紫色の花の
咲く山草なり

山吹 ハ山に多し多く生ず四月頃黄色ある花
なり

芭蕉 ハ濕草なり水木に如く葉大きく三年ハ
花咲く其大さ盆位なり形ハ蓮花に
似たるものなり

瞿麥 ハ田野に生ず又人となと造る其苗小穂の
如く花の色ハ色々あり

蕃椒 人の作るものにて春芽を生ずて白き花と關
き秋に至りて其実熟まれば赤くその
味は辛くその皮は酸なり

葛 ハ其形ち鴨の掌の如く木石等ハ纏ふ蔓草
なり

枝 幹より横分出たるものと枝とのひま

葉 枝の節々へ出たるものと葉とのひま

苔 芽生ずるものにて苔とのひま

花 實を孕むものなり花とのひま

葎 花の中心より生ずるものと葎とのひま

幹 地より上へ真直に生ずるものと幹とのひま

鶴 ハ形ち白鳥より大く足首長く洲渚に遊ぶ林
木に棲み夜半に鳴き水辺に餌を求むる鳥
なり

鷺 羽毛白く雪の如く又頭は長き糸のやう
さだ毛の常々林に棲み水邊を食むる鳥なり

鳥獸 山水林會の類及び獸
畜の類ハ總て此部小集む

鷺 羽毛白く雪の如く又頭は長き糸のやう
さだ毛の常々林に棲み水邊を食むる鳥なり

單語彙解

山園雜錄

鴉 あ ハ黒き鳥と人里は多く群れ鳴くき鳥なり

鷹 たか ハ疏暴なる鳥なりハ剛く鉄の如く諸鳥を
取て食ふものなり

雁 かり ハ大なる水鳥と足短く春小至れば寒國へ帰る
秋よりれば寒國より来る

燕 つばき ハ毎年四月頃南より来て人家の中へ巢をつくる
八月頃に至れば又南へ帰り往く小鳥なり

雉 けし ハ原禽なり羽毛美しく尾長く鉄く地震を知
て必ち其前より鳴く鳥なり

牛 うし ハ角有り大なる獸なり人カを助け又食用と
するものなり

豕 ぶた ハ捨たるものと食ふと人家々あまきと畜之食
用とあり

犬 いぬ ハ柔順なる獸なり又よく人よ助け其命を
ひ又夜中の守りあり

鼠 ねずみ ハ形ち兎に似て耳短く尾ハ毛多く長くと身の
丈は同し家毎に住するものなり

狐 きつね 形ち小犬の如く昼穴を伏し夜出て食ふ
其性狡猾なる獸なり

兎 うさぎ ハ家兎野兎の二色ありて其耳長く前足短
く後足長く鉄く飛ぶものなり

鷺 さぎ 其色黒き水禽なり夜ハ林を棲み昼ハ善く
水に没し魚を取る故人之を捕て魚と
あめと業とするものなり

梟 かぶと 眼ハ猫の如くなれと昼見え夜ハ飛んで鷹と取
て食ひ長ぶれ其母を食ふものなり

鴛鴦 うづすま ハ主た二棲し其羽色美しく又雄雌離れ
水中に淨遊する水鳥なり

鷺 さぎ 鷹に似て大く力強し鷹と取り大なるものハ
後又ハ小兒にも取り食ふものなり

鶺鴒 あひぢ 形ち鴨に似て高く飛能はる人里は善く常
に溝泥を好んで食ふものなり

鷓鴣 せせり ハ其形ち鷹に似て小く人里は多く鷓鴣の雛その
他の物を攫て行くものなり

鳩 とび ハ其類尤も多く山を棲むものなり里は棲むものなり
豆を好んで食ふものなり

鳧 かひ ハ家鴨に似て小く鉄く寒く堪へ群る
飛声風雨と疑はる水鳥なり

鷄 けい ハ家毎に飼ふものなり其種類多く鉄く鳴
て時を告るものなり

馬 うま ハ疾く馳り車と引重きを負ひ人のカを助
するものなり

熊 くま ハ豕に似て大く冬穴を棲し性軽捷なり
高き木の上を猛獸なり

鹿 か 大さ小馬の如く牡ハ角有り冬も夏も至れば落
る山林を棲し田圃は出て穀類を食ひ此と
声の哀れなるものなり

猫 ねこ 鼠を防ぐ為し家毎に畜ふ小き獸なり婦
女子の愛するものなり

猴 さる ハ其形ち人の如く身毛多く鉄く踊舞
し人を慰まむものなり

狸 ねね 大さ狐位なり黒と黄の斑あり毛有り鉄く鴨鷄
を食ふものなり

鶺鴒 あひぢ 一鳥に似て水辺に多く常小首尾を
揺るものなり

鶉 こぶた 昼穴を伏し夜至れば群れ飛び田野を多
く食用するものなり

木兎 うさぎ 眼ハ猫の如く両耳あり昼伏し夜出て
野を遊ぶものなり

鸚鵡 あひぢ 其類多く人音と真似るものなり
鳥なり

鳥 とり ハ大さ鳩の如く常に水面を軽く群れ遊ぶ水
鳥なり

蝙蝠 ひょうぶ 形ち鼠に似て黒き薄肉の翅有り夏出く
冬は穴に居たり夜に飛ぶ山禽なり

鷹 形ち目白く似て其色黒く春の始に轉々人よ愛せらる小鳥なり

雀 人家の軒先を築き遊り一類群飛一類類好んで食ふ小鳥なり

雲雀 状ち鶉に似て小く草中を棲ぎ麦の熟する頃鳴き高く穿く原禽なり

獺 形ち狐に似て毛の色青黒く水中に棲ぎ取て食ふ獸なり

狼 形ち犬の如く尾八下へ垂れ群行し人を食ふ故に西洋各國よこを狩る職務とす

虎 高さ三尺位長さ七尺位毛の色黄赤く黒く斑あり爪錐の如く性黠く一生物を取る食ふ獸なり

鼠 鼠に似て長く毛の色黄赤く赤く鳥鼠を取る血を吸ふものなり

栗鼠 形ち鼠に似て大きく尾は毛多く常よ土又木の孔に棲ぎ能く鳴き栗豆等好んで食ふもの有り

時鳥 状ち雀の如く羽の色黒く口赤く夏に至れば晝夜啼て止まらざる其声の哀多し

水鶏 大き鳩の如く雌雄に似る夜に至れば人の戸を敲くやうに啼く水辺に棲ぐ鳥有り

九斤鶏 形ち鶉の如く大く又尾短く脚よ毛有り其卵は鶏の倍の産する

猪 山中に棲む猛獸なり夜に入ると畑を荒らすものなり

貉 形ち狸に似る鼻尖り毛多く丘山野に伏し夜に出て虫類を食ふ獸なり

象 亞細亞又アフリカに産し象に似て高さ七八尺力足の馬に勝る鼻の長さ五六尺れとて食物を拾ひ食ふものなり

鼠 形ち鼠の如く常よ土中に棲ぎ田で害するものなり又日を見れば死ぬものなり

翼 鳥の空を翔り飛ぶ為よ左右に生たる羽根なり

羽 魚の鱗の如く鳥類の身体中に生たるものなり

尾 鳥類の体の終る所別よ生たるものなり

角 獸類の頭の上生たる骨と云ふものなり

魚蟲介

河海江湖の有鱗無鱗魚化、卵、濕生の虫類及び介甲龍蛇の種属ハ此部門中に入る

鯉 八川や湖に生す其味上品なり又大小あり三十六枚の鱗あり

鱸 世伊古の長トなる魚の四時取れ夏に至れば其味のとら魚なり

龜 冬に水中に蟄し春夏に出て溪谷を遊び卵を砂地に産む又捕んとすれば甲の中へ四足首尾を縮むものなり

蝦 八海川湖等に生す足多く長く腹の外に手を持つものなり

鯛 江海に生する魚其形ハ鯛に似て扁く潮に離れば直赤くある魚なり

鮒 八鯉に似て小く河湖に生す泥を好む魚なり

蟹 池沢清水の中生す其性躁しく沫を吐き二の蟹ハ足の足を以て長く横小往くもの有り

蛤 海中に生す紫の斑あり其形ハ栗に似たる貝にて食用よまする

蜆 ハ江河より多く生一其形ち蛤に似て色黒く両頭の
上より白く元たる斑の汁よ食用よりまら

蜻蛉 ハ大本の足四ツの薄き紗のやうな翼ありて
頭大く九月頃多く出て蚊や蚤と食ふもの
なり

蜂 ハ形ち牛蚤に似て黒く尾より針あり誤るまら
時ハ其痛甚しきものなり

螢 ハ濕熱の氣を感して化半一腹の下より陰火を
放つ虫なり

蛙 ハ脚長き故に能く飛び性好んで陸沼地等にて
半々日の暮まで待て鳴く虫なり

蛇 ハ種類多く形ち鱗鱗に似て長く其色黒く
白き斑あり腹より能く行くものなり

鯨 ハ海中第一の大魚なり形ち鱗の如く長き尾
と相同じく其長きものなり

鰻 ハ鱗に似て鱗多く尾の所より並びく重なる刺の
あり海魚なり

鮭 ハ鱗に似て大く其肉赤く味の鮮きものなり
また又水産物の名も盛なり

鯖 ハ口尖り脊背斑あり魚なり北海西海の辺
より多き魚なり

堅魚 ハ鱗に似て大く嘴尖り鱗多く色青黒く
光りたる海魚なり又此肉を切り蒸
すなり

鰻鱺 形ち蛇の如き川魚なり背より肉の鱗ありて
春の先は鱗一夏に至れば肉は其味ひの鮮
きものなり

年魚 ハ海より谷川より多く生ずる小魚なり形ち
柳の葉の如く生長し其年の肉は死す

金魚 ハ其色赤らつ紅白交りたるもの美しく尾
三ツあり小魚なり

章魚 烏賊に似て大く頭中より八足ありて病多く
煮れば赤く変り其味は鱗に似て物有る

水母 ハ其色黄く眼もく形ち田の如く上層より
下層に物ありて耳の如く又足の如く海中に
浮くものなり

單語彙釋

鰻 ハ二片より對する海中の岩に附て居る
ものなり

蝶 其類多しとも皆四ツの翅ありて性花を好む卵
生の虫なり

蟬 ハ蟬蟬の化しるもの薄く美し羽四枚あり
六月頃本より鳴く虫なり

蠅 ハ暖を喜ぶ寒を惡む性人を攪く其く驅れ
んと来り殺せども生るものなり

蜘蛛 ハ其類多く軒端より巣を造りて
其より諸虫のやうに待て食ふものなり

蠶 ハ桑の葉を食へて繭を造りて卵生の
虫なり

鰻 ハ鯉に似て身圓く頭扁く性好んで泥を食ふ
ものなり

鰈 身扁く頭小く口尖り脊背黒く腹白く
両眼より並びたる海魚なり

黄頰魚 ハ頭大く口又大く北海より多し性寒
く喜ぶ夏の見えぬ塩より長く
腹より多しなり

鱈 口細く長く頭より紅点あり形ち梭子魚に
似て細き海魚なり

河豚 ハ河海より多く状ち斗の如く背青白く
黄なる鱗ありて鱗多く肝及び子は毒なり
よく食ぬるものなり

鰻 ハ海中より群行し其鱗脱し易し人取て食
ひ又油とるものなり

白魚 白き小魚なり東京品川海より多し未
だ至れば鱗火を焚き其集る待て取
るものなり

烏賊 ハ形ち草囊の如く口の側より八本の足あり
長く帯の如く害を逃れんとす時ハ腹中の墨
を吐き却て此墨を取らるものなり

海鼠 ハ形ち蛙に似て大く目又骨多く鱗無く
よりの物なり又物に觸れれば縮少も
なり

蠟 ハ海中の石に附て生し形ち岩の如く一房毎に
中より肉なりて食用よりまら

三十一 公園或反

龍 (水) 棲し陸に生れ龜と類と肩より食用
とて味のものなり

紫螺 (螺) 類の類より田く殻の數角より口田く
て蓋の殼を以て煮て食用するもの

蛭 (水) 中濕生するもの其形は蛭に似て扁く
鉤く人馬等の血を吸ふものなり

蚤 (色) 赤く肥なる化生の虫なり鉤く飛び血を
吸ふものなり

蚊 (晝) 伏し夜に飛んで人の血を吸ひ煙を忌む
ものなり

子子 (濁) 水より化生するもの性好んで腫て
鱗に水のよ群と遊ぶものなり

蛞蝓 (蝸) 牛に似て殼なく二本の角より足
さく腹行する濕生虫なり

鱗 (魚) 類の尾より頭の方へ重りつものなり
鱗よりひきぬ

淺刺 (色) 形は共の蛤に似て黒く紫の斑より又腹
中は真珠の之を尾張真珠と云ひしもの

蝨 (蛭) 類より頭小く羽大きく六七月頃晝夜
啼て止らざる化生の虫なり

蝸牛 (濕) 地に生ずるもの形は蛞蝓に似て四ツの
角より又殼を背て行き驚くとわれは首尾
を殼の中に入れしもの

蝨 (卵) 生の虫より六本の足より性静し人の血
を吸ふものなり

蚯蚓 (濕) 虫より土中より棲し雨降れば出で晴
れに夜に啼くものなり

螳螂 (頭) 大きく二ツの手鎌の如く鋸の齒より又
足は四本より行くとき尤も捷く小虫を取
食ふ卵生の虫なり

蟻 (春) 出る食と求り冬に土中を蟄し好んで群
行する卵生の虫なり

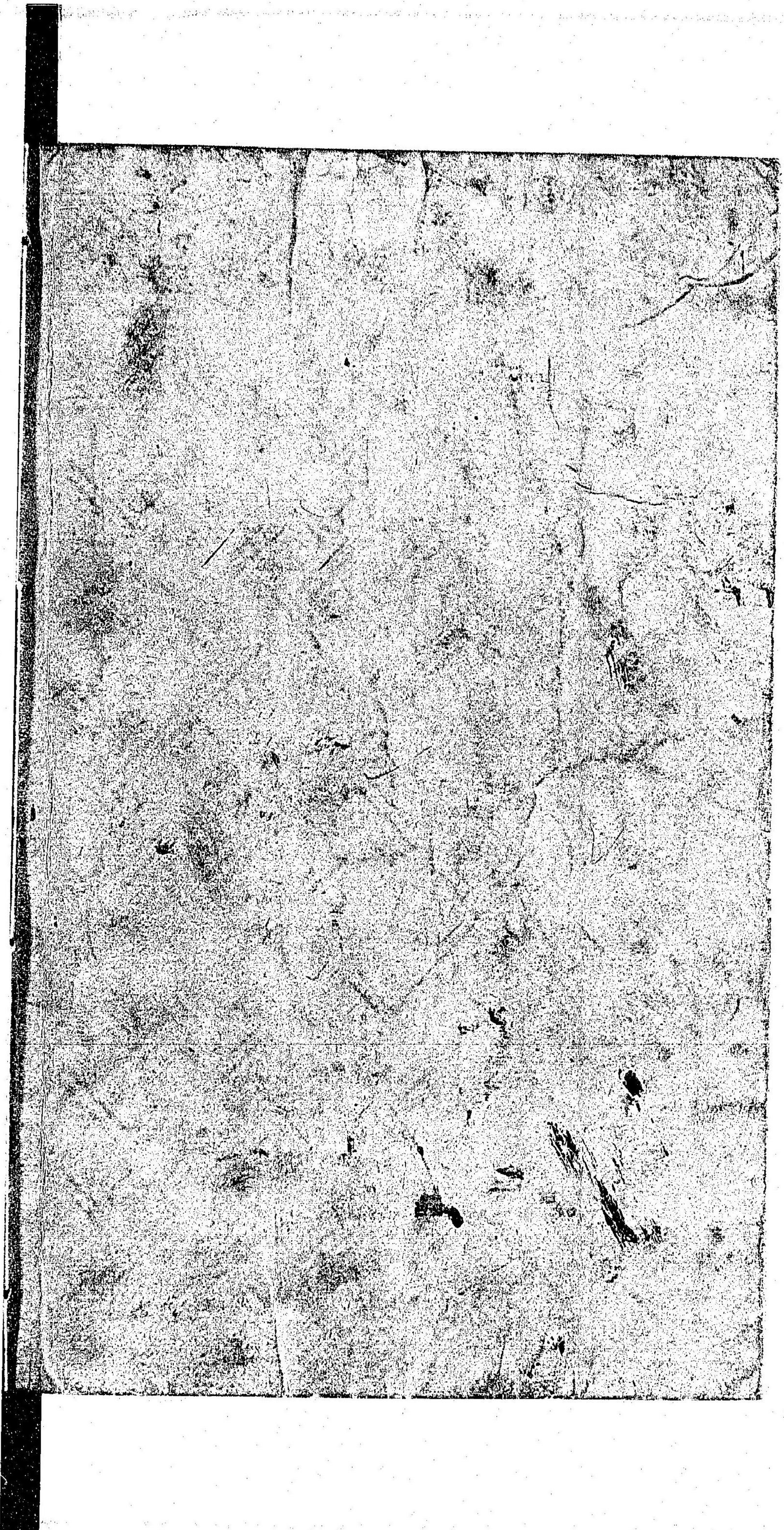
鱗 (魚) の脊中の上や側より附くもの鳥の翅の如き
もの鱗よりひきぬ

官許 明治七年六月二日

同年七月刻成

松井惟利編輯

同 藏版



特34

900

二

一本

077955-000-3

特34-900

単語篇諺解

松井 惟利/編

M7. 7

DAC-1435

